



日本「アジア英語」学会 ニューズレター

No. 6 (January 2000)

第6回全国大会桃山学院大学で開催

日時: 1999年12月11日(土)

10:00~18:00

会場: 桃山学院大学

12月11日(土)、桃山学院大学において第6回全国大会が開催されました。

第6回全国大会プログラム

大会総合司会 末延 岑生 (神戸商科大学)

9:30 受付

10:00 開会の辞: 橋内 武 (桃山学院大学)

会長挨拶: 本名 信行 (青山学院大学)

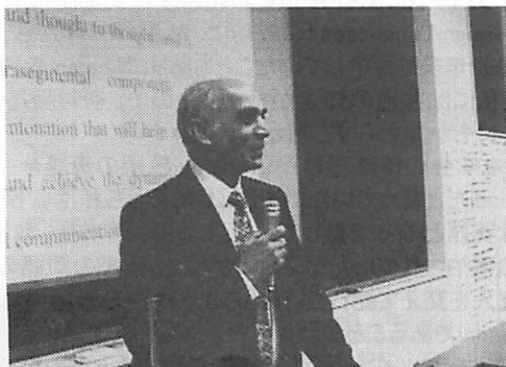
開催校代表挨拶: 原山 煌

(桃山学院大学・文学部長)

10:10-11:40 特別講演:

Prof. Paroo Nihalani (大分大学)

"A Multi-perspective Approach to the Dynamics of Global Communication: Pragmatics of English Language Education Beyond 2000"



〈講演中のParoo Nihalani教授〉

11:40 - 12:00 会員総会

(12:00-13:30 昼食休憩)

13:30-15:30 研究発表

司会: 大原 始子 (梅花女子大学)

1. "English for Academic Purposes (EAP) in Indonesia"

Eugenius Sadtono (名古屋商科大学)

2. "The Transfer of Connotations of *Katakana-yougo* on English Vocabulary by Japanese Speakers of English"

渡辺 敦子・Jie Shi (国際基督教大学)

3. "The English Umbrella: A New Paradigm for Englishes"

米岡ジュリ (熊本学園大学)

4. 「台湾国民小学における『英語教育』の現状と課題」

相川 真左夫 (和歌山信愛女子短期大学)

(15:30-15:45 休憩)

15:45-17:45 シンポジウム

テーマ: Discourse Analysis and English for Japanese

司会: 津田 早苗 (東海学園女子短期大学)

発題:

Sanae Tsuda (東海学園女子短期大学)

"Indirectness in Discourse"

Beverley Elsom Lafaye

(東海学園女子短期大学)

"Discourse Markers and Language Teaching"

Christine W. Ogawa (金城学院大学)

"Critical Discourse Analysis and Language Teaching"

Yuriko Kite (関西大学)

Eton Churchill (京都西高等学校、

Temple University Japan)
"Requests by Japanese Learners of
English in an Immersion Context"

閉会の辞: 吉川 寛 (中部大学)
18:00 懇親会 (於 聖ペテロ館5階)

大会をふりかえって

吉川 寛(中部大学)

第6回全国大会は、美しいキャンパスの桃山学院大学で開催された。末延氏の総合司会で橋内大会実行委員長、本名会長、会場校代表の原山文学部長の挨拶に続き、Paroo Nihalani教授による特別講演が行われた。教授の講演は、英語の音声教育はリズムや抑揚のような超文節的要素を優先すべきであり、従来からの標準変種の文節音素習得重視は単に教師側の便宜であるとの内容で、大変示唆に富むものであった。

午後に入り、先ず4名の研究発表が行われた。いずれの発表も大変興味深いものであった。

Sadtono氏のインドネシアの英語教育における語彙力、読解力不足など様々な問題点の指摘は、日本の英語教育の現状と重なる点多々あり考えさせられた。

渡辺・Shi 両氏の研究発表は、カタカナ用語は批判の対象になりがちであるが、プラス面にも目を向け英語学習への利用を提案するものであった。

米岡氏の"The English Umbrella ..."は、中心にどの変種をもモデルにしない「核英語」を置き、その周りを標準変種も含め全ての英語変種が等価に並ぶという新しいパラダイムを提唱したものであった。

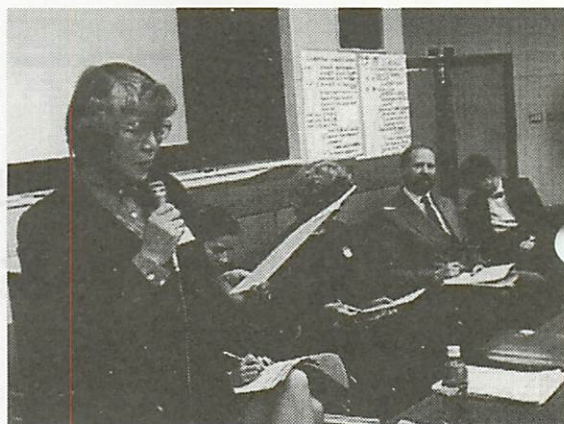
相川氏の発表は、2001年から始まる台湾での小学校英語教育における教員採用の現状と課題に関するもので、2002年から予定されている日本の小学校でのいわゆる「英語教育」の参考となるに違いないと思われる。

研究発表に引き続いてのシンポジウム"Dis-course Analysis and English for Japanese"は、津田氏が談話レベルでの間接表現の重要性を、Lafaye氏が軽視されがちな談話内でのいわゆる「つなぎの語句」の重要性を、小川氏が談話内容における中立性、公正性の重要性を、Kite、Churchill両氏が日英対照比較の観点から日本の若年英語学習者による要請表現の調査結果を報告した。いずれもこれまで余り取り上げられなかった新しい視点での指摘で、フロアとの活発な討論となった。

今大会の発表内容を通して言えることは、従来

の英語教育で「周辺の」と思われてきたものが、実は「中心的」なものと同様に重要であるという視座に立った発表内容が多かった気がする。当然ではあるが、本学会の理念と主旨に整合している。

今回の大会は、会場校関係者の多大な尽力により、会場への交通アクセスが空路以外必ずしも便利とは言えないハンディをまったく感じさせない充実した大会になった。



<シンポジウムの様子>

Paroo Nihalani教授Attend記

榎木 鉄也 (神戸市立工業高専)

1999年12月11日に桃山学院大学でおこなわれた第6回全国大会で、私は大分大学のParoo Nihalani教授にアテンドする機会をえた。といっても、実際に私がしたことは、講演前にNihalani教授をゲストハウスまで迎えに行くこと、特別講演での手伝い、そして講演終了後に小1時間話したことだけである。いずれにしても、Nihalani教授にアテンドして、さまざまなお話を伺うことで、インドや南アジアの言語や英語を研究する私は、非常に興味深いことを観察することができた。

Nihalani教授がかつて教えていた、インドのハイダラバードにあるCentral Institute of English and Foreign Languages (CIEFL)に、私が1991年から1992年まで留学していたこともあり、Nihalani教授と私には共通の知人が多かったので、初対面だったにもかかわらず、話が弾んだ。

本学会の田嶋理事が、Nihalani教授の母語をHindiだと言っていたので、はじめのうち私は教授とは英語とHindiで話していた。しかし、講演後、教授の宿泊されていたゲストハウスで、教授の同郷の友人を交えて話しているうちに、教授の母語がSindhiであることがわかった。

Sindhiは、インド憲法で特に保護すると定めた22

言語のうちの1つであり、インドで社会的・文化的に重要と認められた言語の一つである。また、Sindhiは、社会言語学的にも非常にユニークな言語である。

Sindhiは故地が現パキスタンのSindh地方で、現在、パキスタン国内で用いられているほか、インドパキスタン分離独立時に現パキスタン側のSindh地方から逃れてきた非ムスリムのSindhiたちの母語として、インド国内でも使用されている。

Nihalani教授が育った言語環境も、社会言語学的に非常に特殊である。Nihalani教授は、現パキスタンSindh州の州都であり、パキスタン最大の都市でもあるカラチで誕生されたという。そして、幼少時、学校での教育用語はウルドゥー語だったそうである(ウルドゥー語は南アジアのムスリムの共通語的存在で、アラビア文字系のウルドゥー文字を用いている)。Sindhiの文字もアラビア文字系の文字で、Nihalani教授も、母語であるSindhiの文字を使用できる。インドのことをよく知らない人なら、このことを当然のことと考えるであろう。しかし、インド国内で、ムスリムの象徴とも言えるアラビア文字系の文字を使用する非ムスリムは、このSindhi(Sindhiを話す民族)だけであろう。それだけ、Sindhiはインドでも特殊な言語なのである。

一方、Nihalani教授、教授の友人、友人の妻そして私との間の会話の言語選択・言語の切り替えなども、まことにインド的なものであった。

私を交えた会話は基本的に英語とHindiでおこなわれ、どちらかというと、英語が用いられる比率の方が高かった。これは、Hindiがある程度できるものの、私が非インド人であるため、インド人の頭にこびりついている「非インド人＝英語を話す」というパラメーターに支配され、Nihalani教授とその友人たちは、私を会話に参加させるには英語を用いなければならないと考えてしまうためだと思われる。もっとも、私のHindiがヘタだったのも理由の一つかも知れないが。

一方、Nihalani教授とその友人と妻だけで会話するとき、Sindhiを主に話していたが、時折、Hindiや英語にswitchしていた。これは、話の内容が彼らの母語のSindhiだけで表現しきれないためであろう。また、内容に差し支えない範囲で、Hindiを理解する私にも会話に参加させるよう配慮して、意識的にHindiにswitchする場面もあった。

大会でNihalani教授の特別講演を聞かれた会員も感じたであろうが、教授の英語はエンジンバラ仕込みのイギリス英語とインド英語のハイブリッドである。しかし、教授の長年にわたるさまざまな国での生活とコミュニケーションの経験により、教授の英

語はイギリス英語やインド英語を超えた、より普遍的な、世界で通じる英語のモデルの一つになりうるように思われた。

事務局から

1. 次大会について

先の全国大会時でもアナウンスいたしました、第7回全国大会は、東京都渋谷区の青山学院大学にて7月上旬におこなう予定です。大会実行委員長は、本学会会員で、同大学の木村松雄氏です。

2. 理事選挙について

全国大会時に開かれた会員総会で何回かご報告いたしました、現理事の任期が2000年3月31日までとなっております。それに伴い、理事選挙を行います。選挙に関しては、別紙の送付状をご参照の上、投票願います。次期理事の選挙に関して、理事選挙に関する細則に基づき、昨年12月末までに理事長が選挙管理委員会を任命しております。

3. 学会紀要について

学会紀要『アジア英語研究』(*Asian English Studies*)第2号の準備は着々と進んでおります。第7回全国大会までに刊行するよう編集委員は鋭意努力しております。

4. モノグラフ・シリーズについて

学会では、出版活動をより活発にするため、学会紀要の他に、モノグラフ・シリーズを刊行することを計画しています。モノグラフ・シリーズは、個人または複数の著者による長編の論文、論文集、アンソロジー、資料、記録、ルポ、覚え書きなどをカバーするものにしたいと検討しているところです。

5. 年会費について

1999年度分年会費を未納の会員は、2000年3月末日までに必ずお支払いください。年会費を3,000円と低く押さえてあるため、学会の運営も楽でないのが現状です。また、年会費はなるべく夏と冬の全国大会の時にお支払いいただければ、事務処理上、非常に助かります。ご協力、よろしく願います。

6. ホームページの編集等について

現在、(株)アルクのご好意で、ALCのウェブサイトにて学会のホームページを置かせていただいています(<http://www.alc.co.jp/jafae/>)。事務局では、ホームページを有効活用するために、多くの会員の方に積極的に学会のホームページを利用いただきたいと思います。そのために、会員の方々にホームページの編集等についてご意見をお寄せいただきたいと思います。また、アジア各国やアジアの英語に関するさまざまな情報も、

事務局までお寄せいただければ、ホームページやニューズレターに積極的に掲載していきたいと考えています。

7. JAF AE主催海外研修について

今年の9月頃に、本学会の主催で第1回海外研修を計画しております。期間は10日前後、研修予定地はインドです。費用は、できるだけ安くしようと考えていますが、20万円から25万円くらいになります。この海外研修の目的は、アジアでの現地体験、アジア英語の使用実践、現地研究者との交流、会員の相互親睦です。日程・内容が決まり次第、詳細をお知らせいたします。

第7回全国大会研究発表募集

第7回全国大会は、2000年7月上旬に東京都渋谷区の青山学院大学にて開催いたします。研究発表を希望される方は、要旨(日・英どちらか)をA4用紙1枚にまとめて、5月1日(月)必着で、電子メール、FAXまたは郵送にて、事務局までお送り下さい。

CALL FOR PAPERS for the 6th National Conference at Aoyamagakuin University in Tokyo

The Conference Committee invites submission of abstracts for papers. Submission is by e-mail, fax or mail. Abstracts for papers should be no more than 250 words in length. The deadline is Monday, May 1, 2000. Please send it to the JAF AE Secretariat (address below).

他学会からのお知らせ

第7回国際語用論大会

2000年7月9日~14日
於ハンガリー、ブダペスト
7th International Pragmatics Conference
July 9-14, 2000
Budapest, Hungary
問い合わせ先 (For more information)
Fax: +32-3-2305574
E-mail: ipra@uia.ac.be
URL: <http://ipra-www.uia.ac.be/ipra/>

Fourth International Conference
on Foreign Language Education
and Technology (FLEAT IV)
July 29th - August 1st, 2000

Kobe, Japan

The conference will be held at the Kobe Bay Sheraton Hotel, Ashigei Rokko Island College, and RIC (Rokko Island Center), Kobe, Japan. The main theme for FLEAT IV is 'Language Learning and Multimedia: Bridging Humanity and Technology.'

For further information, contact Professor Jun Arimoto at fleatQ&A@kuins.ac.jp, or visit www.hll.kutc.kansai-u.ac.jp:8000/FLEAT4.html

2000 RELC International Seminar on Language Curriculum and Instruction in Multicultural Societies 17-19 April 2000, RELC, Singapore

For further information, contact Mr. Thomas Khng at admn@relc.org.sg, or visit www.relc.org.sg

<編集後記>

今回は、ニューズレターに載せる記事が不足して、編集者自ら「アテンド記」を書いてしまいました。ちょっとマニアックな記事だったと反省しています。普段、非常に忙しいため、インド人と接触することがほとんどなかったため、久しぶりに知的な興奮を味わいました。また、ヒンディー語を話すのも、久しぶりだったのですが、不思議なことに、Nihalani 教授の顔を見たら、なめらかに話すことができました。私にとって、ヒンディー語は大学で勉強した言語ですが、それ以上に、インド留学時に体で覚えた言語です。普段使わなくても、体が覚えていたのでしょうか。なお、「アテンド記」の文中に何度も出てきた Sindh という語は、ウルドゥー語で「スインド地方」の意味のほか、「インダス川」の意味も持ち、「India」という語の語源でもあります。昔は、外国にとって、Sindh 地方がインドの玄関口だったのです。

会員の皆様にも、ニューズレターを有意義な内容にし、また、有効に活用していただくため、どんどん情報や記事を事務局までお寄せいただきたいと思います。

2000年1月20日発行
編集・発行 日本「アジア英語」学会
代表者 本名信行
編集長 榎木蘭也
発行 (有)タナカ企画
事務局 〒182-8525
東京都調布市緑ヶ丘1-25
白百合女子大学
田嶋宏子研究室内
FAX: 03-3326-4550
E-mail: tina2@gol.com
学会ホームページ: <http://www.alc.co.jp/jafae/>

<< JAF AE Secretariat >>

Professor Hiroko Tina Tajima
Department of English, Shirayuri College
1-25 Midorigaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8525